エイサー
世界遺産　勝連城跡
うるまの誉れ
闘牛
伝統文化
獅子舞

うるまの誉れ
琉球の歴史を文

世界遺産
琉球王国のグスク及び関連遺産群
「勝連城跡」

今からおよそ600年余り前、
中継貿易の拠点として栄えていた勝連城に、歴史の大きな波が押し寄せました。
琉球王国のさらなる安定を図るため、首里王府は勝連城を攻め、
城主・阿麻和利を滅ぼしたのです。
急峻な丘の上に今もそびえたつ城壁には、時の権力にも屈しなかった
阿麻和利の誇り高き魂が刻まれています。

刻む天空の城壁

World Cultural Heritage Site Katsuren-Jo Site

Approximately 600 years ago a great historical wave washed over Katsuren Castle, a prosperous erstwhile site for transit trade. The Shuri royal government launched an attack on the castle, overthrowing the castle lord Amawari in order to further stabilize the Ryukyu Kingdom. The proud spirit of Amawari on that day, who did not yield to the powers that be, is etched into castle walls, which even today rise up magnificently on the steep hill.

東の曲輪側から見た勝連城跡

うるま市のシンボル “カッチングスク”

うるま市の東海岸から太平洋に突き出す「勝連半島」の丘の上に佇むのが「勝連城跡（かつれんじょうあと）」です。2000年に『琉球王国のグスク及び関連遺産群』として首里城などとともに世界遺産に登録され、年間17万人（平成25年度統計／市商工観光課）に及ぶ観光客が訪れる人気スポットとして賑わっています。地域の人からは「カッチングスク」という名で親しまれ、そびえたつその姿は荘厳な雰囲気を醸し出しています。

頂上から見渡す360度のパノラマ風景は絶景です。南は知念半島から北はやんばるまで一望することが出来ます。「エメラルドブルー」「コバルトブルー」「スカイブルー」など目の前に広がる沖縄の美しい空や海を楽しむことが出来ます。

グスク時代に長い時間をかけて、一つひとつ石を積み上げて完成した勝連城。中国との交易が盛んだった15世紀頃、9代目の按司（あじ）（城主のこと）・茂知附（もちづき）と、10代目按司・阿麻和利（あまわり）の時代が勝連城の最盛期とされています。貿易に力を注ぎアジアの中継地点として経済力、軍事力を高めていきました。中国元王朝時代の陶磁器などの出土品からも当時の様子が伺えます。1458年、琉球王国統一を目指していた阿麻和利が、緻密な計画のもと首里王府軍より滅ぼされ、勝連城の幕は閉じます。

現在では中高生による現代版組踊「肝高（きむたか）の阿麻和利」、うるま市出身の唄者（うたじゃ）や地域のエイサーが勝連城跡に集結し泡盛片手に沖縄民謡を楽しむ「ぐしく島唄あしび」など、勝連城跡を舞台にした贅沢なイベントが開催されています。

うるまの誉れ

一の曲輪（北東側）の城壁から北西（うるま市前原、塩屋方面）を望む

\ Interview /

我如古（がねこ） 則子（のりこ）さん

（うるま市史跡ガイドの会 会長）

地域の歴史資源を掘り起す

うるま市史跡ガイドの会は、平成22年、世界遺産の勝連城跡や市内の史跡など、地域のすばらしさを知ってもらうことを目的に結成されたボランティア団体です。毎週水曜日に午後2時から午後5時まで歴史的な背景を交えながら勝連城跡を案内しています。26年度は集落の発掘ということで、平良川、川田、屋慶名地域などの古いカーや史跡、文化財などを調査しました。

勝連城跡は歴史価値だけでなく、素晴らしい眺望が楽しめます。今年3月から勝連城跡内を案内する4か国語対応のポータルサイトが始まったので、スマートフォンを利用すれば、外国の方でも勝連城の歴史を詳しく知ることができます。

The Symbol of Uruma City

Sitting atop a hill on the Katsuren Peninsula, which extends into the Pacific Ocean from the east coast of Uruma City, is the vestige of Katsuren-Jo Site. In 2000, it was registered a World Heritage Site with Shuri Castle under the designation "Gusuku Sites and Related Properties of the Kingdom of Ryukyu." Towering above the surrounding area, Katsuren-Jo Site forges a grand and glorious presence.

The 15th century was Katsuren Castle's golden age when trade with China was flourishing. Enterprises focused on commerce, boosting the castle's economy and military might as it served as a transit hub for trade with Asia. But, in 1458, Lord Amawari, who had aspirations of unifying the Ryukyu Kingdom, was decimated by the Shuri royal government's army, which brought the affluence of Katsuren Castle to an end.

世界遺産勝連城跡を語るときに不可欠なのが勝連城最後の按司（城主）・阿麻和利です。北谷間切（現嘉手納町）の出身で、幼い頃から機転の効く異端児として知られました。当時、悪政に苦しんでいた民衆と相談し、献上する酒器に武器を隠して奇襲をかけ、当時の按司・茂知附を倒しました。

勝連城は代々、与論島や沖永良部島、大島諸島などを通して本土交易ルートを確保していました。積極的に朝鮮や中国との交易を広げることで、巨大な富を築き上げます。按司になった阿麻和利は、さらに活発に交易を進め勝連地域にかつてない繁栄をもたらします。人望も厚く、中部の勢力が広がるにつれて首里王府は「王権を脅かすほどの脅威」と警戒します。高まる勢力の対策として、琉球国王の娘「百十踏揚」を嫁がせました。その後、阿麻和利は東の勢力、護佐丸を倒し、首里王府討伐を視野に動きましたが、妻から首里王府へその情報が渡り逆に襲撃され落城しました。

首里王府への反逆者として語り継がれていますが、首里王府が編纂した歌集「おもろさうし」のなかで、阿麻和利のことを肝高（気高い）と表現されることが残っています。

2000 年から地元の中学生、高校生による現代組踊「肝高の阿麻和利」が始まりました。阿麻和利にまつわる歴史を歌と踊りで表現する現代版の組踊です。県内をはじめ、東京公演、ハワイ公演など 200 回以上の公演をしています。演技や舞台の完成度が高さはもちろん「地域文化の再発見」や「子供たちの感動体験の場作り」など、活動そのものが地域の振興として貢献しています。当時の時代に思いを馳せながら現代の子供たちが魅せる肝高の阿麻和利は感動を呼ぶストーリーとして注目されています。

現代版組踊「肝高の阿

げんだいばんくみおどり
きむたかのあまわり

Contemporary Kumiodori Dance “Kimutaka-no-Amawari”

The Katsuren-Jo Site cannot be mentioned without acknowledging Amawari, the last aji or lord of Katsuren Castle. Amawari actively promoted trade and created a period of prosperity never before seen in the Katsuren region. Nevertheless, the Shuri royal government saw him as a menace threatening its power. In the end, Amawari was outmaneuvered and destroyed.

In recent years, the historical narrative has been reassessed, and Amawari has come to be viewed as a local hero. Since 2000, local junior and senior high school students have performed the contemporary kumiodori dance “Kimutaka-no-Amawari.” The level of excellence, which the performance and theatrics have reached, has prompted a rediscovery of local culture and provided a dramatic experience for children. The performance has also helped promote the region.

うるまの誉れ

麻和利』

闘牛

うるまの誉れ

Bull Fight

photo by YUKIE KUDAKA

真剣勝負に拍手喝采

闘牛王国と呼ばれるうるま市。沖縄一を決める大会には、県内の闘牛ファンが集まり、熱い声援をおくります。

沖縄県で「闘牛が最も盛んなまち」として知られているのが、うるま市です。「闘牛」と聞くと「スペイン」を思い浮かべるかたも少なくありませんが、日本における「闘牛」はスペインのように人と牛が闘うのではなく、闘うという本能を残した牛同士を闘わせる競技です。円形の闘牛場のなかで繰り広げられる、重量1トン以上もある牛と牛のぶつかり合い。まるで格闘技を観るような気分が味わえる、迫力の勝負です。沖縄では闘牛のことを「ウシオーラセー」と言い、大衆娯楽として親しまれています。

沖縄県で闘牛大会は一年間に約20回以上開催されています。そのうちの2/3以上がうるま市で行われて（県内一の多さ）います。特に年に3回、うるま市で行われる「全島闘牛大会」は県内のタイトルマッチが組まれる注目の大会。会場には5000人以上の観客が集い、立ち見客であふれかえります。うるま市にはドーム型の闘牛場「うるま市石川多目的ドーム」があり、天候に左右されずに闘牛を開催できることが開催地として選ばれている理由となっています。また、安慶名城跡に隣接した「安慶名闘牛場」や公園内に併設された「伊波闘牛場」など、市内に闘牛場が点在しています。

沖縄県における闘牛の歴史については明確な起源は定かではありませんが、明治後期の新聞に闘牛が取り上げられた記事が確認されています。その後、第二次世界大戦によって闘牛文化は中断されてしまいますが、1947年に闘牛大会が再開。テレビでも放送されるようになり、ファン層を増やしていきました。強い牛は「スター牛」として人気が出ることもあり、1960年代に破竹の41連勝を記録し、5年間無敗を誇った「ゆかり号」は今でも語り継がれているスター牛です。

photo by YUKIE KUDAKA

photo by YUKIE KUDAKA

Bullfighting
Thunderous Applause for the Earnest Match

Uruma City is known as the bullfighting kingdom. Fans from throughout Okinawa come to cheer enthusiastically and watch the match to determine the strongest bull in all of Okinawa.

Bullfights in Okinawa are not like those in Spain where the contest is between man and bull. Here, two trained bulls lock horns. Contests take place in a circular arena where bulls weighing over a ton each clash in an impressive battle.

Each year, about 20 bullfights are held in Okinawa, and over two-thirds of these take place in Uruma City.

＼Interview／

久高（くだか）　幸枝（ゆきえ）さん
（闘牛写真家）

闘牛女子が撮る闘牛写真

家族で牛を育てる闘牛一家に生まれたので、小さいころから牛の世話をやっていました。写真が好きな父の影響だと思うのですが、自分の牛のデビュー戦を自分で撮りたいと言ったら、父がカメラを買ってくれたんです。撮った写真は父が現像に出してプリントしてくれました。仕上がった写真を見ると、父が撮ったものと違う。何が良くなかったのか父に聞いて、撮り方を覚え、そのうち他の人からも撮影を頼まれるようになりました。

最近は闘牛を観戦する女性も増えています。本気で闘っている姿がかっこいいと、みなさんおっしゃいますね。写真を通して、恰好よさだけでなく、牛の優しさ、人と牛との触れ合いといった、闘牛場では見られない部分も紹介していきたいと思います。

熱気あふれる闘牛場に勢子の声が響く

試合が行われる闘牛場は、周りを鉄枠で囲まれた直径18メートル円形の対戦場。鉄枠の外はぐるりと360度が観客席。段差があるので、どこからでも見やすい設計となっています。

闘牛のルールは牛同士の一対一。そこに、牛を勢いづかせ操る役割の勢子（せこ）と呼ばれる闘牛士が牛の横につきます。真正面に牛が対峙した形で試合開始。正面から互いに頭をぶつけあっていきます。

正面から頭で相手を押していく「押し」、相手の牛に角を打ち込む「ワリ」、角を引っかけて相手の首をまわす「カケ」、相手の横にまわり腹を突く「腹取り」など、数々の技を駆使しながら勝負していきます。闘牛の特徴の一つ、角にも様々な形があり、試合では重要な武器となります。試合時間は早くて数十秒、長ければ30分を超える長期戦になることも。試合が進むにつれ、舌をダラリと口から垂らすなどの体調の変化が見られ、試合が動くタイミングといわれています。体重や体格を考慮し、軽量級・中量級・無差別級の三つの階級に分かれています。無差別級には1トンを超える牛も登場します。大会では10〜13の試合が組まれ、試合が進むほど強い牛が登場します。全島闘牛大会では最後の2、3試合がタイトルマッチとなります。

牛は闘牛場に入ってきてから臨戦態勢に入り、気合いも充分。それ以上に気合いが入っているのが勢子たち。試合中、彼らの気迫のこもった叫び声が闘牛に力を与え、試合が動いていきます。正に「人牛一体」となった闘い。勝利した牛に乗りガッツポーズを取る勢子たちの勝者の笑顔も、見どころのひとつです。

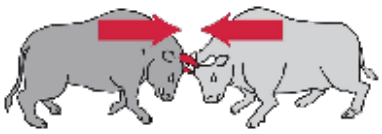
Bullfight Arena Overflowing with Excitement

According to bullfighting rules, matches are one-on-one contests between two bulls. Next to each bull is a coach called a seko, whose job is to encourage the bull. A contest begins with the bulls confronting each other, whereafter they butt their heads together.

During the matches, the sekos spirited shouts give a boost to the bullfight as the contest storms ahead. This battle is truly a “partnership between man and bull.” No one should miss seeing the smiles of winning seko as he sits atop his bull, holding up his fist in triumph.

闘牛のワザ

押し



正面から渾身の力を込めて直線的に相手を押すこと。押しだけで勝負が決まることは希であり、体勢を崩した後続く腹取りでの決着が多い。

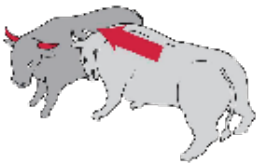
ワリ、ツキ

相手の眉間めがけて角を打ち込むこと。体重が乗った強烈な技が決まった場合は、かなりの威力となり、間をおかずに相手を敗走させることができる。

カケ

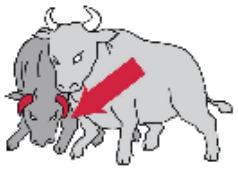
角を掛けて相手の首をまげること。もっともよくでる技であり、相手の首が90度近くも回転し天井を向いたままになることもある。

腹取り



相手の隙を狙い横腹を一気に襲う技。この技を得意とするのは、敏捷で体全体にバネがあり瞬発力豊かなタイプで花形牛となることが多い。

持たせ込み



相手に体重をかける技。相手の押し込みや掛けを避けるため防御目的にやることが多い。

＼Interview／

伊波（いは）　大志（たいし）さん
（闘牛実況アナウンサー）

闘牛をもっと身近に

闘牛のラジオ番組をきっかけに闘牛組合連合会の依頼で試合の実況をやることになりました。実況のリハーサルは出来ませんから、前もって戦歴、特徴、得意技など牛についての基本情報を準備し、試合の時には牛の紹介や技についての解説をまじえて実況しています。

「ワイドー」は闘牛にかかわるヒーローをつくりたいなと思って漫画家志望の後輩に描いてもらったデザインをもとに衣装を作りました。子どもたちがよく声を掛けてくれるので、自腹をきった甲斐はあったなと思っています。

うるま市の商工会では、闘牛の試合以外にも今後、闘牛に関する様々な企画を検討しています。ご期待下さい。

エイサー

Spirit of Ryukyu

うるまの誉れ

伝統エイサーの郷、ひと味違ういにしえの舞

地謡が奏でる謡三線、一糸乱れぬ踊りと響きわたるパーランクーのリズム。煌々と照らす満月の下、夏の夜の青年たちの饗宴は、夜更けと共に盛り上がります。

沖縄の踊りで有名な「エイサー」は、古来より旧盆の最終日（旧暦７月１５日）に、戻ってきた祖先の霊を送り出す念仏踊りです。先祖を大切に思う沖縄の人たちにとって大切な行事として受け継がれています。この日の為に各地域の青年会（エイサーを踊る地域団体）は、何ヶ月も前から毎晩、遅くまで練習を重ねています。

エイサーを構成するのは、先頭で大きな旗を持つ「旗頭（ハタガシラ）」、太鼓を持って踊る「太鼓打ち（テークチャー）」、太鼓を持たずに踊る「手踊り（ジーヌー）」、三線（さんしん）を弾きながら唄う「地方（ジカタ）」、顔を真っ白に塗った道化役「チョンダラー」などがいます。

うるま市には「伝統エイサーの郷」と言われ、格式のあるエイサーが残っています。その特徴の一つとして、「パーランクー」という小さな片面の手持ち太鼓を主に使います。軽やかな「パン、パン」という音を響かせながら整然と並びながら踊ります。

衣装も地域ごとに特徴があり、白とグレーのシンプルな衣装から、黒地に金の刺繍が施された豪華な衣装、花笠などバラエティーに富んでいます。演目や踊り方は各地域ごとに異なり、ダイナミックに太鼓を持ちながら空へ跳び上がったり、大きな花笠をかぶって見事な舞を見せたり、荘厳な出で立ちで一糸乱れぬ舞をみせるエイサーなど、青年会ごとに独特な踊りをします。

毎年旧盆がすぎた頃に開催される「うるま市エイサーまつり」は市内のエイサーが集結します。一度にたくさんのエイサーが見られるので、まつりを目当てに県外から訪れる人も。琉球古来から続くエイサーは、うるま市の夏の風物詩なのです。

Eisa
Haven of Traditional Eisa with a Different Twist on an Ancient Dance

The rhythm of paranku drums resounds to perfectly coordinated dance and choruses played on shamisen. Under a radiantly shining full moon, young people gather for banquets on summer evenings, lively events continuing late into the night.

Since ancient times, renowned Okinawan eisa has been handed down as a religious dance performed on the last day of the Bon Festival (July 15th of the lunar calendar) to see off the spirits of our ancestors, which have returned for the three-day festival. For Okinawan people who hold their ancestors dear, this is an important event which has been passed down to us over the ages.

The Uruma City Eisa Festival is held just after the lunar calendar Bon Festival every year and brings together eisa groups from around the city. It is an excellent chance to see many different eisa performances at one location, so spectators will even make the journey from outside the prefecture. Eisa, which has been performed since ancient times in Ryukyu, is a special part of summers in Uruma City.

\ Interview /

比嘉（ひが）　晃志（こうじ）さん
（うるま市青年連合会 会長）

エイサーを通じて地域とコミュニケーション

家族の影響でエイサーは高校１年からやっています。毎年4、5月頃から練習がはじまるのですが、その当時は部活が終わった後、夜8時頃から10時頃までエイサーの練習に出ていました。

現在、うるま市内にある青年会は約30団体ほどで、青年会に入る人は減る傾向にあります。学生はアルバイトや勉強に忙しいのでなかなか参加は少ないですね。

うるま市エイサーまつりは毎年旧盆の次の週の土日に開催されます。地域によって古い伝統的なエイサーから、現在的なスタイルまで、さまざまなエイサーが一堂に見られるのが、このまつりの醍醐味です。エイサーをすることによって地域の人たちとのコミュニケーションが深まり、とてもいい社会勉強になると思います。

うるま市の バラエティー豊かなエイサー

2005年に４つの市町村が合併したうるま市には、「石川・具志川・勝連・与那城」の各地域に特色のあるエイサーが存在します。石川地域には昭和初期から続く長い歴史のあるエイサーから、比較的結成されて年数の浅い青年会も。昭和初期から途絶えることなく続いている「伊波青年会」は、空手着を思わせる衣装が独特です。女性は「四つ竹」と呼ばれる琉球舞踊によく使われる楽器で音を鳴らし、ゆっくりと舞を魅せるのが特徴です。旧盆明けには獅子舞で集落を練り歩く儀式「旗すがし」も行われます。石川の歴史とともに受け継がれている「石川エイサー保存会」は男性のみで構成され、空手着姿にピンク色の布を巻いた姿。締め太鼓に「ソーグ」と言われる鐘を鳴らすのがとても珍しいです。

具志川地域にある「天願エイサー」は、躍動感溢れる舞を見せます。「赤野青年会」は美しいフォーメーション、バラエティーに富んだパーランクーの打ち方が特徴的です。鮮やかな緑色の衣装も印象的で、10曲休まず踊り通す、パワフルな青年会です。

与勝地域（与那城・勝連）のエイサーは、琉球古来から続く、シンプルなグレーの衣装を纏う『僧侶スタイル』のエイサーが残っています。特に「平敷屋エイサー」が有名で「与那城青年会」「平安名青年会」も僧侶スタイルです。パーランクーのバチの持ち方や、たたき方に違いがあり一糸乱れぬ荘厳な舞を見せます。花笠を使って舞うのが「屋慶名エイサー」。うるま市の代表的なエイサーとして知られています。全島沖縄エイサー祭りの優勝経験のある「比嘉エイサー」の舞は、屋慶名エイサー、赤野青年会などの前身といわれ、力強い踊りと空手の構えが特徴です。市内でも多岐にわたるエイサーの文化。それぞれ独自の舞やスタイルを守りながら、毎年、先祖を送っています。

Uruma City's Medley of Eisa

Uruma City was formed through the consolidation of four municipalities in 2005. Each of these areas, Ishikawa, Gushikawa, Katsuren and Yonashiro, has its own unique eisa style.

Ishikawa preserves a style of eisa with a long history dating back to the early Showa period.

Tengan eisa in the Gushikawa region is always a lively and energetic performance.

Yokatsu region (Yonashiro and Katsuren) eisa maintains a priestly style in which performers dress in simple gray costumes in keeping with the time-honored Ryukyuan tradition.

獅子舞

Lion Dance

うるまの誉れ

獅子山のふもとにのこる伝統の舞い

二人一組で操る沖縄の獅子舞。８つの字に伝統的な獅子舞が残っているうるま市では、年に一度、沖縄中の獅子舞が一堂に会して「全島獅子舞フェスティバル」が催されます。

獅子舞は沖縄の各地域にとけこんだ伝統文化です。その由来は中国から渡来したといわれています。獅子舞をおこなう目的は、災害を百獣の王である獅子によって除けてもらうためのものとされています。悪霊を祓い、弥勒世(ミルクユー)を招き、五穀豊穣・子孫繁栄や地域の繁栄をもたらすといわれ、沖縄各地で受け継がれています。うるま市には昔、獅子が住んでいたという「獅子山」があり、市内の8つの字で伝統的な獅子舞が保存されている獅子に縁が深い土地といわれています。

県外の獅子舞は布の胴を一人で被る一人獅子に対して、沖縄の獅子舞は縫いぐるみのなかに二人で入るのが特徴。獅子の頭は梯梧(でいご)の木をくり抜いて作られ、黒漆などを塗っています。胴体は芭蕉の繊維を加工し、赤や白に染め上げてふさふさとした胴に仕上げられています。

眠っている獅子と、それを誘い出す棒術を使う男「わくやあ」で進行していきます。わくやあの軽快な舞いと三線や銅鑼、ホラ貝の音色に乗せられ、次第に獅子も舞っていきます。おおらかでコミカルな動きも交えるので、見ている人を飽きさせない舞いです。

沖縄各地の獅子舞が一堂に会するイベント「全島獅子舞フェスティバル」は、民俗芸能である獅子舞の保存・継承・発展を目的としたイベントです。毎年旧暦9月15日に近い日曜日、うるま市で開催されています。沖縄の各地域から、さまざまな獅子舞が演舞を紹介します。それぞれの特色ある伝統芸能をダイナミックに披露し、観客を魅了していきます。

Lion Dance
Traditional Dance at the Foot of Lion Rock Mountain

The lion dance, which, as legend has it, was brought to Okinawa from China, is performed to exorcise evil spirits and bring bountiful harvests, thriving posterity, and prosperous community. These dances have been handed down over the years in each local community. Lion Rock Mountain where the lion is said to have lived is located in Uruma City, and the lion dance tradition is preserved in each of Uruma City's eight districts.

The All Okinawa Lion Dance Festival assembles lion dance performers from all over Okinawa in one location. This event helps to preserve, pass on and develop the lion dance genre of folk entertainment. The festival is held in Uruma City on a Sunday around September 15 according to the lunar calendar each year. A variety of lion dances are on display from communities throughout Okinawa. Each of these distinctive traditional performances is dynamically presented, mesmerizing audiences.

＼Interview／

幸地（こうち）　良明（よしあき）さん
（うるま市天願獅子舞保存会 会長）

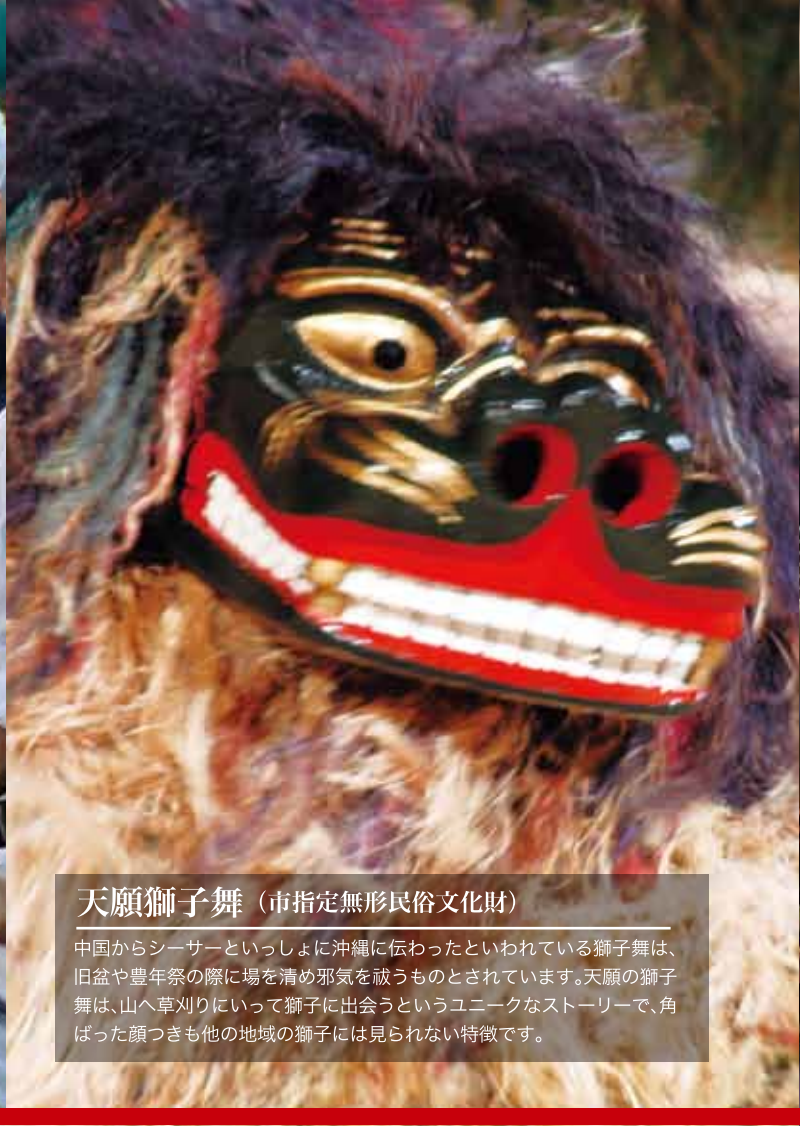
伝統を守り、地域の活性化につなげたい

天願の獅子は「神獅子」で、古くから地域の守り神として伝えられてきました。今も公民館で大切に保管されており、獅子舞を踊るときは区長さんを中心に神事を行ってから使用しています。天願獅子舞の特徴は、喜怒哀楽を豊かに表現するところ。飛んだり、跳ねたり、回転したり、退場する時には振り向いたりしてとてもユーモアがあります。10以上の技があり、獅子を操る2人のタイミングがとても大切です。

保存会は後継者を育てるために結成されました。会員は現在25人ほど。毎月模合を兼ねて集まっています。保存会では獅子の毛の材料である芭蕉を栽培し、年に一回、収穫して繊維をとることもやっています。これからも地域に根付いた伝統を大切にしながら、地域の活性化につなげていきたいです

平敷屋エイサー
（市指定無形民俗文化財）

300年以上の伝統があるといわれ、1996年、環境庁が選定した「地域で将来に残したい日本の音風景100選」に選ばれました。三線の地謡にパーランクー、男女の手踊りが加わり、ゆったりした振り付けには力強さが感じられます。



天願獅子舞（市指定無形民俗文化財）

中国からシーサーといっしょに沖縄に伝わったといわれている獅子舞は、旧盆や豊年祭の際に場を清め邪気を祓うものとされています。天願の獅子舞は、山へ草刈りにいって獅子に出会うというユニークなストーリーで、角ばった顔つきも他の地域の獅子には見られない特徴です。

伝統文化

うるま市の各地域に残るエイサー、獅子舞、闘牛などの伝統芸能や文化は、長い歴史をもっており、古くは琉球王朝時代まで遡ることができます。これらの伝統芸能や文化は、琉球王国から沖縄県、沖縄戦を経てアメリカ軍による統治、そして本土復帰と、時代の大きな波に揺られながらも、今日まで脈々と伝えられてきました。いつの時代でも地域の人々が心の拠り所として大切に守り、親から子の代へ、子から孫の代へと、互いにふれあいながら、まさに手渡しで伝えられてきたのです。

Traditional Culture

Eisa, lion dances, bullfighting and other traditional performance arts and culture surviving in the communities of Uruma City have a long history, extending back even to the time of the Ryukyu Dynasty of old. These performance arts and culture have been passed down unbroken to today, drifting along the waves of time from days of the Kingdom of the Ryukyus to the formation of Okinawa Prefecture, the US military administration after the Battle of Okinawa, and on past Okinawa's return to Japan. In every age and time, people carefully protect these traditions with all their heart and soul, and take care to hand them down from parent to child and then child to grandchild as these performance arts and culture touch a chord with all generations.

田場ティンベー
（市指定無形民俗文化財）

「ティンベー」は沖縄の古武術の一つ。ティンベーとは直系70cmほどの円形の盾のことをいい、片手にティンベー、もう一方の手に長刀を持ち、鉾を持った相手と攻防の技を演じます。中国から伝わったといわれていますが、田場地区では古くから受け継がれている伝統文化の一つです。

マーラン船の建造技術
（市指定文化財）

マーラン船とは18世紀初め頃、中国の福建地方から伝来したといわれる、沖縄で最も普及した船で、山原船とも呼ばれました。うるま市の船大工越來治喜さんが持つマーラン船の建造技術は市の文化財に指定されています。

三線（県指定有形文化財、市指定有形文化財）

うるま市には、古くは琉球王朝時代に作られたとされる三線のほか、名器と呼ばれる三線がいくつか残されています。三線翁長開鐘は尚溌王（在位1804年～1834年）が愛用した名器で、真壁型の正型、芯の部分に「翁長開鐘」と朱塗りで銘記があります。ちなみに開鐘とは、夜明けに撞く寺院の鐘のことでよく響きわたることを意味します。三線真壁型は琉球古典音楽の大家・幸地亀千代（1896年～1969年）が愛用し、戦前に辻町の名器の一つとして伝えられた三線です。そのほかにも、三線平中知念方、三線鴨口与那方など、歴史のある三線が伝えられています。

うるま市民が誇りにしているもの。

それは心のよりどころとなり、魂を熱くする。

宮城ウシデーク
（市指定無形民俗文化財）

ウシデークは沖縄の農漁村で広く見られる祭祀舞踊です。豊年祈願などが無事済んだことを祝う行事で、女性だけで行われます。村のアシビナー（遊び庭）やアシャギナーと呼ばれる広場で、ニートゥイ（音取り）と呼ぶ小鼓を持った年長の女性を先頭に、中年の主婦や少女が続き、左回りに輪を描きながら踊ります。

津堅島の唐踊
（県指定選択文化財）

津堅島の伝統行事「八月遊び（旧暦8月9日～15日）」の中で行われる踊り。唐踊と呼ばれていますが、中国の踊りではなく、外来のものという意味づけだといわれています。パーランクーを打ちながら、首を左右に振って踊ります。

伊波メンサー織
（市指定無形民俗文化財）

地機の原型といわれる原始的な機で織られる織物で、日本に現存する織機では、北海道のアッツシ織と八丈島のカッペタ織の3例しかないという貴重なものです。一般的な機織と違い、経糸を木に固定してもう一方を織り手の方に張り、緯糸の織り込みが進むと織り手が前に進みながら織っていきます。

Uruma Column
うるまコラム

アマミチューとシルミチュー

うるま市にある浜比嘉島は琉球開闢神話にまつわる史跡が残る島としてよく知られています。

琉球開闢神話は、神代の昔、アマミチュー（アマミキョ）とシルミチュー（シネリキョ）の二神が天から降りてきて、浜比嘉島に住みつき、やがて子供ができて、そこから沖縄各地に人が増えていく、というのが大まかな内容です。浜比嘉島にはアマミチューとシルミチューが暮らしたとされるシルミチュー霊場やアマミチュー墓があり、どちらにもアマミチューとシルミチューが祀られています。

アマミチューとシルミチューについてはよく知られていますが、その子どもについてはあまり知られていません。名は「ウミチルー」といいます。伝承によるとウミチルーは島の南東側の兼久集落の沖にあるクバ島で生まれましたが、10歳の時に海に投げ捨てられました。これについて『勝連村史』には次のような話が記されています。

明治の初め頃、毎晩神の霊示に悩まされてノイローゼになった当時のノロが、他の神職祭事関係者を伴ってクバ島に登りました。この大岩の頂上までは男でも登れないほど険阻な崖になっていますが、ノロは岩に足を踏み入れるや大声で「ウミチルーヤクマドー（ウミチルーはここだぞ）」と呼びながら、やすやすと頂上に登り、一塊の人骨を拾い集めて用意した白布に包み、これを抱いてまた楽々と駆け下りてきました。そして霊示の通り抱いてきた骨をアマミチュー墓に葬ったところ、ノロのノイローゼはすっかり治ってしまったそうです。

また、『かつれんの民話』によると、明治の初め頃には、シルミチュー霊場でもある事件が起きました。シルミチュー霊場の洞窟内には瓦葺の祠があり、中に天帝子、天太子、天孫子と刻された三個の石と多数の小石が詰められ、さらに二個の鏡を入れた壺が安置されています。

毎年年頭拝みの際には、ノロが浜から小石を拾ってきて壺に入れる例になっており、小石の数はその入れ始め遺構の年数を表す貴重な資料でしたが、明治初期に小石が壺一杯になっていたので、当時の関係者が小石の歴史的意味を悟らず数えもせずに捨ててしまった、というのです。

アマミチュー墓やシルミチュー霊場は、今も島のさまざまな祭祀が行われている聖地であり、また島外からも多くの人が訪れ、祈りと感謝の心を捧げています。

琉球開闢神話は、神代の昔、
アマミチュー（アマミキョ）とシルミチュー（シネリキョ）の二神が天から降りてきて、
浜比嘉島に住みつき、やがて子供ができて、そこから沖縄各地に人が増えていく。

アマミチュー

シルミチュー